

幼児生活団幼稚園

「コロナ禍での幼稚園生活の工夫」

栗原美枝子

コロナ感染が拡大し、園児が幼稚園に登園できないという事態になった。幼児にとっては、初めての集団生活での多くの体験が送れないことに対して、教職員は非常に危機感を覚えたが、この環境においての園児とのつながり方を考え、新しい保育の体制をとる準備をしてきた。オンラインの導入や保育環境の見直し、幼児に出来る感染防止対策など多くの課題と向き合いながら目の前にいる子どもにとって最善の保育を目指した。

I. 休園

幼児生活団幼稚園は、コロナ感染の広がりへの危機感から、3月以降子ども達は登園せず、4～5月は休園して電話や Zoom を通して各家庭とつながり、6月1日から園児の分散登園を始めた。約2か月の長い休園期間には、登園できない子ども達の気持ちを思い教職員で出来る様々な工夫を出し合った。

4月以降の休園が決定したのは3月31日、その後4月21日には5月末日までの休園が決定した。4月10日の入園式は延期、幼児生活団は2か月という長い休園期間をとることになった。

この期間、担任は各家庭に手紙を送り、電話や Zoom を使った面談を行った。全く経験のなかったオンラインの操作は男子部教員の助力を得て習得した。面談は各家庭での園児の生活についての報告や相談の時間となったが、そこでさまざまな様子がうかがえた。

ある園児は、はじめは家にいることを喜んでいましたが、生活団を思い出して突然大泣きしてしまった。また別の園児は、6月からの登園を知り、友達に会えるうれしさがあるものの、保護者と離れるのが少し怖くも感じていた。これを聞いた担任は、休園中の子ども達が、家で遊び落ち着いた生活をしている反面、隠れたストレスを抱えているのではないかと、さらなる配慮を感じた。

II. オンラインでのやりとり

手遊び、歌や体操など家で繰り返し見ることが出来る3分ほどの動画をスクールソーシャルワーカー

と協力して作成、約60本もの作品を配信した。当初、担任達はカメラに向かって手遊びなどすることが少し恥ずかしかったようだが、何より自分たちが楽しんでいる姿を見せることに集中するようにした。これは園児と先生たちにとって今までにない関わり方となった。

III. カリキュラムの工夫

新たな関わりはこの他にもある。保護者会や入園説明会もオンラインで開催された。また対面で行われていた6才組のピアノレッスンも Zoom を活用し、事前にオンラインで先生と面談したのち6月中旬から行った。

IV. 分散登園

長い休園期間が終わった6月1日には、まず延期されていた入園式が行われた。感染予防の為4才組17名、各家庭の保護者1名と教職員のみ出席し、短時間での小規模開催となった。教職員たちは短い時間でも園児たちにとって思い出に残り、喜んでもらえる日になるよう準備を進め、式当日は今までの会いたかった気持ちを込め笑顔で迎えた。その思いが伝わったのか、泣いてしまう新入園児もおらず、とても落ち着いた雰囲気になった入園式となった。

分散登園は、最初は1日1クラスずつ、公共交通機関の混雑を避けた時間を各家庭で考慮し登園することにした。その後は段階的に日数を増やした。本来ならせつかくの登園なので思いっきり遊んで欲しい。しかし密にならない環境や動線の設定、マ

スク着用の呼びかけなど対策をしなければならなかった。加えて夏に向けて熱中症になる危険性も高くなるため、園庭遊びや水分補給の際には休息しながら適度にマスクを外すなど、体調管理が必要となった。実際に、担任は園児の様子を見ながら対応をとる難しさを感じ日々話し合いをしながら進めていった。感染予防の観点などから、1学期は園児も教職員も新たな環境に慣れるための期間となった。

感染予防対策は、その他の行事開催にも影響を及ぼした。6月27日、28日に予定されていた6才組お泊りは1日だけの日帰りの集まりに変更。また各学年の遠足など全て中止になった。小さな子ども達だけが通う生活団では、感染予防策はもちろん、園児との関り方も含め繊細な対応が求められた。

このような時だからこそ柔軟な思考のもとで進むべきだと全教職員で共有し話し合いを進めながら行っていた。

V. コロナ禍での登園

2学期になると4才組から6才組の3クラス全てが登園する体制をとった。園児にとって人との触れ合いや関わりあうことが大切であると考えての再開である。健康と安全に気を配りながら慎重に対面形式の保育に戻すよう進めてきた。マスクを着けて登園してくる園児たちは、感染対策のための不慣れた生活様式からくる緊張感はあるものの、うれしい気持ちの方が勝っているようだ。

9月の第1週は、園児たちの体力低下に配慮して3クラスとも午前までの保育にした。次いで昼食を含めた14時までの保育は、第2週から5才組と6才組で、第3週から4才組で始めた。場所は以前のようなクラス別の部屋ではなく、比較的大きな部屋にクラスごとに分かれて過ごしている。感染防止の為室内ではマスクを着用し、屋外では外す。園庭で遊ぶときも、同じ時間に2クラスが合わないよう時間を調整している。制約を伴う生活だが、子ども達は友達や先生に毎日会えるうれしさを元氣いっぱい過ごすことが出来た。

VI. 食事作り

お食事はクラスごとの部屋に分かれて、同じ方向を

向いて食べることにした。2学期始めはお弁当だったが、9月28日から保護者と教職員で作る食事作りが再開した。園児たちは満面の笑顔で心を弾ませながら落ち着いて食べていた。緊急事態宣言が再発されると、保護者の食事当番は中止とし、教職員が作ることとなったが、宣言が解除した時には保護者の食事当番が再開された。子ども達もとてもその日を楽しみにしていた。

VII. 対面でのカリキュラムの工夫

対面再開でとりわけ配慮した一つが、ピアノレッスンである。防音設備の整った狭いピアノレッスン室は気密性が高い。そこで3部屋中2部屋を使用し、窓、ドアを開けて、室内で先生と園児がレッスン、室外で保護者が聴くことにした。例年のレッスンは、5才組の2学期から始まるが今年度の2学期は、ピアノレッスンから始めず、少人数のグループで音楽の遊びを数回した後、対面の個人レッスンに切り替えた。先生との1対1のレッスンに入る前に、グループ遊びで友達と一緒に音楽の時間を体験し、5才児たちは、自然に対面のレッスンに馴染めたようである。

オンラインから対面へ、約束事の伴った新しい生活様式に園児たちも少しずつ慣れてきた。どんな状況でも遊びを通して学び、成長していく子ども達にとって、伸び伸びと過ごせる空間が大人たちの見守りのもと広がりつつなってきた。

VIII. 引用文献

学園新聞 第719号、720号